

イエスとは何者か

More Than a Carpenter

THE BESTSELLING CLASSIC
ON WHO JESUS IS



JOSH McDOWELL
SEAN McDOWELL

ジョシュ・マクドウェル
ショーン・マクドウェル



イエスがただの大工ではなかったことを
表して生きる
ディック・デイ夫妻に
本書をささげる

More Than a Carpenter, Japanese Edition@2025. Josh McDowell Ministry. All rights reserved. Originally published in English as More Than a Carpenter @ 1977, 2005, 2009, 2024, Tyndale Elevate. All rights reserved.

Produced under license from Cru/Josh McDowell Ministry by Japan Campus Crusade for Christ. No part of this publication may be reproduced, posted online, altered, or used in any manner whatsoever without the express written permission of Josh McDowell Ministry. Please direct all permission requests to Josh McDowell Ministry at www.josh.org. Published and distributed by Japan Campus Crusade for Christ, www.japanccc.org.



目 次

まえがき	ix
1. 私の物語	1
2. イエスは何が違うのか	9
3. 神か大工か	28
4. 科学的にはどうか	40
5. 新約聖書は信頼できるのか	45
6. 嘘のために死ぬ人はいるか	68
7. 死んだメシアが役に立つのか	83
8. パウロに何が起こったか	90
9. 復活はあったのか	103
10. だれがメシアか	119
11. 他に道はない	132
12. 私を変えたイエス	140
推薦の声・読者の感想	152
注	153
いっしょに聖書を学んでみませんか?	161
著者たちについて	162



まえがき

私が最初に本書を著したのは1976年のことです。48時間執筆に集中できる時間を確保し、12ページにわたるメモと大量のコーヒーを手に書き始めました。その時点で願っていたのは、キリストがだれなのかという問題について関心のある人々が真剣に考え、同時にクリスチャンがそのような質問を受けたときにどう答えるのかを助ける本を書くことでした。この無神論からキリスト信仰への私の変遷の物語が1,700万部も売れ、120以上の言語に翻訳され、世界中の読者が信仰について考えるためのきっかけになるとはまったく予想しなかったことです。この本で人生が変わったと言う人と出会うたびに光栄に思うと同時に、恐縮しています。

本書が出版されて以来、世界では実に多くのことが起こりました。イエス・キリストの史実性や聖書の信頼性に光を当てる発見が次々と見つかっています。一方、新たな質問や異論も出されています。そして今の世代、新しい課題と向き合いながらも昔からの疑問も問われ続けています。「イエスとはだれなのか」「イエスが神の子である証拠はあるのか」「聖書が言っていることが事実だとしても、それが自分と何の関係があるのか」などです。

以上を踏まえ、私は本書をもう一度、改訂することにしました。前回の改訂(2009年)では息子のショーンが手伝ってくれました。今回も共著者として参加してもらうことにしました。ショーンはバイオラ大学タルボット神学校の弁証学の教授を務めています。キリストや聖書をはじめとする多くの論点についての弁証論を語る講演者であり、著者、YouTuberとして知られています。学者としての資格も十分です(哲学・神学の修士、弁証学と世界観の分野でのPhD)。私たち二人で本書を一新するため、旧版を改訂し、新しい内容をつけ加え、よく耳にする反論にも応答しました。結果としてできあがった新版は、旧版に見られる事実に対してのたゆまぬ探求心を保ったものになりました。今回の改訂ではショーンが深く関わっていますが、本書の流れは私自身の無神論からキリスト信仰への変遷を中心に置いているため、「私」の一人称で書かれています。

新しい世代が神を探究する上で、本書が大きな役割を果たしてくれることを切に願っています。

ジョシュ・マクドウェル



第1章

私の物語

すべての人の心には幸福と生きがいへの渇きがある——
13世紀の哲学者トマス・アクィナスはこの深い真理を理解していました¹。私がこの人生の渇きに初めて感じたのは10代のときでした。私は幸福になりたいと思っていました。自分の人生が意味のあるものであってほしいとも願っていました。「私は何者なのか」「私は何のために生きているのか」「人生の終わりには何があるのか」——人間を悩ますこれら3つの質問に、いつも追い回されていました。まだ高校生でしたが、その答えを探し求めていたのです。

私が育った地方では、みなが何らかの宗教に関わっていました。私も宗教活動をすることで、何らかの答えが見つかるかもしれないと思っていたのです。教会の活動に150%の心で参加していました。教会が開いていれば、昼夜を問わず出かけたものです。しかし私は、教会選びには失敗したようです。教会の外にいるときより教会内にいるときの方

が、否定的な感情にさいなまれたからです。ミシガンの農場で育った私は、田舎風の実用主義を身に着けていました。その考え方とは「うまく行かないものはすぐに捨てる」というものです。そこで私は宗教心を捨てました。

次に私は、教育を受ければ人生の意味が見つかると考え、大学に入学しました。するとすぐに教授たちから嫌われるようになりました。教授たちの研究室に行っては、時間を忘れて質問攻めにしたからです。教授たちは、私の姿を見ると、研究室の明かりを消し、ブラインドを下げ、鍵をかけるようになりました。大学では多くのことを学びましたが、私が探していた答えは見つかりませんでした。教授も学生もみな、私と同じように問題・疑問・葛藤を抱えて生きていたのです。

ある日大学を歩いていると「俺について来るな。俺も迷子なんだ」と書かれたTシャツを着た学生を見かけました。この言葉は大学にいるみな状況を言い当てたものでした。

教育にも答えはないとわかったのです。

その次には、名声を得れば幸福と生きがいを見つけられるかもしれないと考え始めました。何か高尚な大義を見つけてそのために生き、その過程で学内で有名人になろうとしました。大学で一番

目立っていたのが学生会の執行部でした。この人たちは学生会の予算を管理していました。それで私は学生会の役職に選ばれるように努力しました。学内のすべての人と顔見知

考えてみましょう

「すべての人の心には幸福と生きがいへの渇きがある」とトマス・アクィナスは語りました。
この言葉について、あなたはどのように思いますか。

りになり、重要な決定を下し、自分が招きたい講師を講演会に招くために大学の予算を使い、パーティを開くために学生たちから集めた資金を使うというのは実に楽しい経験でした。

でも、名声から得られる高揚感も長続きはしませんでした。毎週月曜の朝は前夜のバカ騒ぎの後遺症である頭痛とともに目覚め、これから始まる無味乾燥な5日間と向き合うのです。平日は週末のどんちゃん騒ぎのためにただ我慢するだけ。そしてまた月曜が来ると、無意味な5日間が始まるのです。

私が人生に空しさを感じていることは、周りには気づかれないように振る舞いました。それを知られるのは、プライドが許しません。みんなは、私が学内で一番充実していると思っていました。私の「充実感」が見せかけだけとは、だれも気づいていなかったのです。私の充足感^{満ち足りた感}は周囲の状況に左右されていました。すべてがうまく行っていれば私の気分も上々ですが、何か問題があると気落ちしました。ただそれを人に見せることはしませんでした。

みんなは、私が学内で一番充実していると思っていました。私の「充実感」が見せかけだけとは、だれも気づいていなかったのです。

私は大海で波にもてあそばれる舟のような存在でした。ただ私という舟には舵^{かじ}がありません。人生の方向性も自制心もありません。でも、それ以外の生き方をしている人が見当たらなかったのです。違う生き方を教えてくれる人もいませんでした。私は葛藤を感じていました。いや葛藤どころではありません。そのときの私を言い表すのにぴったりの言葉があ

ります。それは「地獄」です。

そのころ学内の小さなグループの存在に気がつきました。そのグループには8人の学生と2人の教授がいました。彼らは一般の学生と何かが違っていました。自分が何者でどこに向かっているのか、わかっているようにも見えました。彼らには信念がありました。信念、それは私がいつも敬意を覚えるものです。たとえその人の信念が私の信念とは違っていても、私は信念を持つ人と時間を過ごすのが大好きです。

考えてみましょう

信念をもっている人のことを、あなたはどのように思いますか。人と話して楽しいと感じる人はどのような人ですか。逆にイライラする人とはどのような人ですか。

強い信念を持った人には、何か特別なエネルギーを感じます。私はそのエネルギーに接するのが好きです。

自分にはないものを、この人たちが持っていることは明らかでした。彼らは忌々しいほどに幸福な人たちでした。そしてその幸福感が大学の忙しい毎日でも左右されるこ

とはありませんでした。彼らはいつも充実しているようでした。この人たちは心に喜びの泉を持っているようでしたが、その喜びがどこから来るかは、私にはわかりません。

しかし、彼らにはもう一つ、私の注意を引くものがありました。それは愛です。彼らには互いへの愛だけでなく、周りの人への愛もありました。ただ愛を語っていたのではなく、実際に愛を行動で表していたのです。人が抱えているニーズや問題を解決しようと、積極的に人を助けていました。これは新鮮で、私を強く引きつけるものでした。

自分がほしいものをだれかが持っていたら、それを自分も

ほしいと思うものです。彼らのグループに続けて参加して
ることにしました。

2週間たったころ、グループの何人かと学生会館のラウン
ジで話し合っていると、話題は神のことになりました。神に
ついて確信がない私は、興味がないかのように装い、こう
言いました。「えっ、キリスト教？そんなものは弱い人間のた
めのもので、知識人には必要ないだろ」。もちろん心の奥で
は彼らが持っているものを求

めていました。しかしプライド
があって、それを私もほしい
ことを言い出すことができま
せんでした。この話題には気
後れするものがあったのです
が、そこから逃げるわけにも
いきません。そこでグループ

**「えっ、キリスト教？ そ
んなものは弱い人間のた
めの、知識人には必
要ないだろ」。もちろん
心の奥では彼らが持っている
ものを求めています。**

の中の女子学生に尋ねました。「みんなは他の学生や教授と
は違っているけど、何か人生が変わる

体験でもしたわけ？」すると、彼女は私の目を見て、一言「そ
の理由はイエス・キリストです」と答えたのです。それは大
学での知的な会話の中では、決して話題に上るはずのない
人物でした。「イエス・キリストだって。そんなのくだらない。
宗教や聖書なんてうんざりなんだよ」。

私はこう言い放ちました。

彼女はすぐに、反論しました。「ちょっと待って。私は『宗
教』と言ったんじゃないの。『イエス・キリスト』って言った
のよ」。彼女が語ったことは、私にとっては未知の分野でし
た。彼女は、キリスト教とは神との関係のことだというので
す。他の宗教では人が善行によって神に届こうとします。し

かしキリスト教では、神がイエス・キリストを通して私たちの
ところに来るのだと…。私は
他の宗教では人が善行に まったく受けつけられません
よって神に届こうとします。 でした。彼女の確信に満ち、
しかしキリスト教では、神 しかも毅然とした態度に、私
がイエス・キリストを通し はびっくりし、無礼をわびる
て私たちのところに来るの ことはしました。「でも、僕
だと…。 は宗教にあきあきしてる。宗
教には一切関わりたくないん
だ」と告げました。

すると彼女は「イエス・キリストは神の子」という主張はどう
思いますか。「キリストは人の身体をもって実在したことは
どうですか」。また「キリストは人類の罪のために十字架で
死んだ」「キリストは埋葬されて3日後に復活した」「キリス
トは今も生きており、人の人生を変えることができる」…こ
れらの聖書の主張を知的な側面から検証してみたらどうか
と提案したのです。

冗談かと思いました。分別のある人間ならみな、キリスト
教が神話を基にした作り話だと知っているではないか。キリス
トが死んだ後、死から復活したと信じるなんて、クリスチャン
はなんて愚かな存在なのか。大学の授業でクリスチャンの
学生が何か意見を言うと、私は相手をずたずたにするまでこ

き下ろしたものでした。クリ
スチャンに脳細胞が一つでも
あるなら、その細胞は孤独
死しているに違いないと思っ
ていました。

考えてみましょう

あなたは宗教をどのよう
に定義しますか？

私は彼女の提案、いや挑戦に受けて立つことにしました。

彼女たちの間違いを証明しようとした。キリスト教ほど根拠の薄弱な思想はないはずです。私は法学部だったので証拠の検証については多少の知識がありました。キリスト教の主張を徹底的に吟味し、この偽物の宗教を完全に否定してやろうと思ったのです。

まずは聖書から始めました。聖書が歴史的信憑性のない書物だという確実な証拠が見つければ、キリスト教全体が崩壊するはずです。もちろんクリスチャンは、キリストが処女から生まれたこと、奇跡を行ったこと、死からよみがえったことが聖書に書かれていると言うでしょう。でも、その記録が信頼できるものでないのなら、キリスト教に何の価値があるのでしょうか。聖書の不確実性を証明できれば、キリスト教が宗教的夢想家たちのでっち上げに過ぎないことを示すことができるはずです。

この挑戦に私は真剣に取り組みました。この調査に何か月も時間をかけました。ヨーロッパの歴史ある図書館でリサーチを行うために、大学を休学することさえしました。こ

の調査旅行の資金を確保するため、学生ベンチャーで立ち上げていた塗装会社の事業を売り払いました。研究旅行の結果、証拠は大量に見つかりました。この目で実際に見なければ信じることのできなかった証拠です。

やがて唯一の結論に達しました。自分の知性に正直であろうとするなら、旧約聖書と新約聖書は古代文書の中でもっとも信頼できるものであるという結論に至ったのです。

でも聖書が信頼できても、イエスという人物はどうでしょ

聖書の不確実性を証明できれば、キリスト教が宗教的夢想家たちのでっち上げに過ぎないことを示すことができるはずです。

証拠は大量に見つかりました。旧約聖書と新約聖書は古代文書の中でもっとも信頼できるものであるという結論に至ったのです。

う。小国の田舎のただの大工が妄想に取りつかれたにすぎないと片づけて良いのでしょうか。

イエス・キリストはただの大工ではありません。この人が

自分について語ったことはすべて真実だったのです。

私の研究調査は、イエス・キリストについての知的理解に変化をもたらしたわけではありません。私の幸福と生きがいの探求に関する3つの質問に、答えを与えたのです。でもその答えについては、本書の最後で話します。

その前に、続く各章では、私の数か月の調査で発見したことの詳細を紹介させてください。そうすれば、キリスト教が単なる神話や夢想家のでっち上げでもなく、頭の鈍い人々をだますための作り話でもないことがわかりいただけたと思います。キリスト教は確固たる真理なのです。

そしてこの真理を知るとき、「私は何者なのか」「私は何のために生きているのか」「人生の終わりには何があるのか」という3つの質問に、答えが見つかることでしょう。

考えてみましょう

もし神が人間になったとしたら、彼が自ら創造したものに語りかける最良の方法とは何でしょうか？